

鶏のロイコチトゾーン症の研究史における暗中模索からの脱出記録(26)

誌名	畜産の研究 = Animal-husbandry
ISSN	00093874
巻/号	688
掲載ページ	p. 857-861
発行年月	2014年8月

鶏のロイコチトゾーン症の研究史における 暗中模索からの脱出記録(26)

秋葉和温*

4) 終戦当時の動物検疫業務はどのようになっていたのだろうか

昭和29年に私達によって最初に兵庫県で発見されたということは、あるいは李永基教授の話されていたことが、真実に近い、原因であったかもしれない。終戦は昭和20年8月15日で、真夏である。その後、台湾から当座の食糧の足しにと鶏を持って、神戸近辺に、かなりの方が引き揚げ、または移住してこられたということである。終戦後の混乱していた時代であるが、鶏が持ち込まれたとすると、当然、動物検疫所も関与しているはずである。このような持ち込みの鶏が記録として残っているのだろうか。

私は丁度、旧陸軍獣医部依託生の同期会が熊本であった時、私達の同期会の会長の元動物検疫所長であった三毛氏に、この件についてお聞きしたところ、22年頃と27年頃に法改正があったので、それまでの記録はないのではとのことであった。

そこで、“我が国の動物検疫業務は終戦当時は、終戦からどのような変遷をたどったことになっているのでしょうか”と、直接、神戸支所長宛てに手紙を出してお聞きした。

川崎洋二氏から次のような資料の送付を受けた。

①日本帝国家畜伝染病予防史(大正昭和第四篇), 68~70, ②家畜衛生史, 昭和5年3月27日, 日本獣医師会, 438~441, ③家畜衛生史, 日本獣医師会, 192~200, ④動物検疫30年のあゆみ(昭和57年)の4点と手紙であった。

これらの資料と手紙から私は次のように理解したとして、畜産の研究54巻, 第6号679ページには詳しく書いているが、ここでは概略に止めた。

動物の検疫業務は明治4年, 牛疫侵入防止のため, 太政官布告が発せられて以来行われている。…第二次世界大戦の「戦局の推移と共に、一般の動物検疫業務は減少し, 施設も遊休化し, さらに終戦後施設は荒廃の度を加えていった」という状況であった。

敗戦という精神的なショック, 召集による所員の減少, 空襲による市街地の破壊, 焼失の波及, 食料難, 各種輸送力の極度の減少などに加えて, 「大量の外地からの引揚業務が進行し, 密航が相次ぐなど」経験したことのない混乱期にあったといえる。そして「海外悪性伝染病の侵入に対しても無防備の状態となっていた。このため, 畜産局長は牛疫予防のための通達を昭和21年8月8日地方長官宛て通達し注意を喚起している」などと家畜衛生史(日本獣医師会)の192ページに書かれている。また, GHQも昭和21年6月21日「日本への家畜輸入に関する件」を発し, 総司令部の許可のない家畜の輸入を一切禁止し, 悪疫侵入の予防を強化したと家畜衛生史の193ページに書かれている。

また①「日本帝国家畜伝染病予防史の69ページには, “支那, 西比利亞以外ノ地ヨリ輸入若ハ移入スル鷄鶩ニシテ検疫官吏ニ於テ繫留ノ必要ナシト認ムルモノハ此ノ限りニ在ラス”とされており, また家畜衛生史の197ページには“移入とは従来朝鮮, 台湾, 樺太, 南洋庁の管轄した地方からのもの”とされていて, 一応は, これらの地方から移入される鶏・アヒルも検疫規則で規制していたようです。但し, 検疫官吏がけい留の必要ないと認めたものは, けい留検査を省略していた可能性が考えられます。そして②「いろいろ当たってみました, 残念ながら鶏の検疫記録は無いようです。各所で時々出てくる検疫記録類は, 口蹄疫, 牛疫, 鼻疽等に限られておりまして鶏・アヒル関係は聞いたことがありません」などと川崎氏からの手紙で教えて頂いた。

このようなことから, 検疫官の不足していた終戦のあの混乱の中では, 前述した悪性伝染病の侵入防止に全神経を尖らせていて, 台湾などからの引き揚げ者や, 神戸の親戚を頼っての移住者などの所持していた鶏などは, 検疫しているなどという余裕はなく, そのまま持ち込ませたため, 記録というものは

* 元農林水産省家畜衛生試験場 (Kazuo Akiba)

ないが、そのようなことが有り得たということは推定に難くない。

5) その当時台湾には鶏のロイコトゾーン症は存在していたのか

昭和29年に兵庫県和田山町にあった農林省家畜衛生試験場中国支場で発見した原虫がロイコトゾーン・カウレリーであると同定したのは、支場時代に私費で購入した Kudo, R. R. Protozoology 1954, の中に *L. andrewsi* Atchley (1951) in chicken という文献のあることを知ったことからである。その後、本場勤務となってから、この文献を調べ、この中で、東洋には *L. caulleryi* という種類と *L. sabrazesi* という種類があることを知ったのである。これらの文献は大阪大学医学部の図書館にあるというので、取り寄せた。これはフランス語の文献であったため、当時、アテネフランセに通っていた園田暁郎技官に翻訳して貰い、*L. caulleryi* に間違いなかろうと判断したのである。

L. caulleryi や *L. sabrazesi* が書かれている Levine N. D.: Protozoan parasites of domestic animals and of man. が出版されたのは1960年(昭和35年)であった。

この頃、私はコクシジウムの大家の角田清技官と同室であった。角田さんの所有されていた次の本のなかで小倉喜佐次郎先生のことを知ったのである。小倉喜佐次郎先生は私の恩師板垣啓三郎先生の先生である。板垣先生からは台湾総督府中央研究所農業部時代の小倉先生の話はよく聞いていた。小倉先生は当時、用賀ヒラキシン研究所を設立されておられた。

大島廣・岡田彌一郎監輯 系統動物学 第一巻(養賢堂、昭和18年)の第三章原生動物各論の第3網胞子虫類は森下薫先生の執筆であるが、その第3目住血胞子虫類2.ヘモプロテウス科の *Leucocytozoon* の項の終わり、すなわち238ページに「小倉喜佐次郎は台湾の鶏に3種が見られると述べている」と記載されている。

そこで小倉先生に手紙を差し上げたところ、早速、試験場(本場)にきて下さって、台湾ではA, B, Cと呼んでいたが、Aが *L. caulleryi*, Bは *L. sabrazesi* 様のもので、Cは円形のものであるなどと教えて頂き、日本のものは *L. caulleryi* と同定して差し支えないとの支持を得たのである。

このようなことから、終戦後に持ち込まれた鶏の中に *L. caulleryi* の感染鶏がいた可能性は高い。

終戦後、持ち込まれた台湾育ちの鶏が *L. caulleryi* に感染していたならば、感染していた可能性は高いが、神戸近辺には、まだ多くのニワトリヌカガが発生している時期であり、そのガメトサイトを吸血して、近くの農家の日本育ちの鶏、この日本育ちの鶏は、この病気には未汚染であったので、容易に感染が、次々と起きたであろうことは十分考えられることである。そして神戸周辺からだんだんと広がって、神戸に近い私達のいた和田山町近くにも広がり、病性鑑定で摘発されたということであるかもしれない。

なお、この台湾育ちの鶏の中にガメトサイトが紡錘形をした *L. sabrazesi* 様の原虫の感染鶏も混ざっていたかもしれない。しかし、この種類は日本では広がらなかったようで、未だ、日本では検出されていない。

また、この紡錘形をしたロイコトゾーンは昭和40年前後であったと思うが、横浜の動物検疫所で、台湾の友人から送られてきたという鶏に検出されたという連絡を受け、見せて貰ったことがある。その鶏は中央線の中野駅の南東に住んでいる方の2階の屋上で飼育しておられた。観察がしたいので、分与をお願いしたが、友人から贈られたものだからと断られた。その後、この鶏の運命は知らないし、この鶏に起因すると思われるような感染は観察されていない。

この種類は、*L. caulleryi* とは異なり、日本では流行する要因がないのかもしれない。

この *L. sabrazesi* 様の原虫としたのはベトナム、インドネシア、タイやマレーシアなどに見られるものとは大きさの点で異なり、台湾のものは特別、大きいのである。したがって、*L. sabrazesi* 様としているのである。このものは台湾大学の張教授により、台湾産ブユで媒介されることが明らかにされている。なお小倉先生がBとCとされていたものは、*L. sabrazesi* 様とした種類の紡錘形(B)と円形(C)のガメトサイトである。これらのものに就いては、今後、免疫学的に、遺伝子学的な検討により、種名を与えるべきであると思っている。

この項の論文を「畜産の研究、第54巻、4,5,6号」に投稿してから、台湾の *L. sabrazesi* 様とした種類は、台湾で最初に発見されていた小倉先生の名前を付けさせて貰って、*L. ogurai* と提案すれば良かったのにと後悔している。

その後、鶏病研究会元理事長の佐藤静夫博士からの依頼で、小倉喜佐次郎先生について日本獣医学人名事典に執筆したさい、下記のような論文を畜産の研究に発表した。

秋葉和温：鶏のロイコチトゾーン症と小倉喜佐次郎獣医学博士との関係、そして知り得た日本統治下の台湾の獣医畜産事情。畜産の研究、62, 6 (2008)～63, 11 (2009)。

この中で、鶏のロイコチトゾーン症と小倉喜佐次郎獣医学博士との関係は詳しく考察しているが、この論文の第二部、日本統治下の台湾の獣医畜産事情の一断面の63巻、第7号、764ページの右側のVI. 20小倉喜佐次郎：鶏住血原虫疾病。五畜防(1933)昭和8年のところで[五畜防：第五次家畜防疫会議報告、まだ探し出せていません—秋葉]と書きました。

この[五畜防：第五次家畜防疫会議報告]のことで、動物衛生研究所に問い合わせたところ、「第五回家畜防疫会議要録」ではないかと思われそうですがということで、ないとのこと。それで二、三の所も検索してみたが、どこにもなかったとのことでした(このことは畜産の研究の第62巻、第12号、1330ページの右側に書いている。)

このことを佐藤静夫氏が覚えて下さっていて、農工大の解剖学教室の蔵書で、農工大に設立される博物館の史料として収められるリストの中から見付けて下さったのである。しかし、史料委員会用として段ボールに入れられ積み重ねられていて、寒い冬であったり、猛暑の夏休みであったり、また担当の先生(東京農工大学大学院 林谷秀樹教授)がベトナムへの長期出張などで、なかなか、それだけを取り出すことが、できなかつたようである。担当の先生が一時、帰国された時、やっと取り出して佐藤さんのところに送ってきて下さったのである。

正式名称は「五畜防：第五次家畜防疫会議報告」ではなく「第五回家畜防疫会議要録」で、伊藤全氏から2011年8月27日付けの手紙で[蒲地氏の「日満家畜防疫会議の経過と終末」]の一部コピーの送付を受け、第五回が台北で昭和7(1932)年12月5-7日に開かれています。]と知らせて下さったように、会議は台湾総督府の会議室で、昭和7年12月5日から7日までの3日間、開催されていた。山脇著大正・昭和第三篇212-252?には出席者の写真も出ているとのことで、山脇著大正・昭和第三編を調べたとこ

ろ、212ページのもの昭和3年8月22日第一回内鮮満家畜伝染病予防協議会記念撮影とされており、252ページには写真はなく、242ページに第八回日満家畜防疫会議記念撮影、昭和10年9月12日、於臺北(臺灣総督府玄関)というのがあったが、この要録には写真は載せてなかつた。

この蒲地氏の日満家畜防疫会議の経過と終末について一部のコピーしか同封してなかつたので第一回のことはわからなかつたが、秋葉：畜産の研究、第62巻、第6号の葛西先生の履歴の717ページの左側の下から11行目に「昭和3年(44歳)8月、『東亜家畜防疫会議』の開催を提唱し、その努力により日・ソ・支各国代表を糾合し、第1回会議を大連満鉄本社で開催。…」とあることから、判明した。第2回からはコピーによる。[昭和四年第二回京城、昭和五年第三回東京、昭和六年第四回関東、昭和7年から陸軍省、台湾総督府が参加して、第五回は台北、昭和八年第六回東京、昭和九年第七回京城、昭和十年から満州国家畜防疫機関が参加]して日満家畜防疫会議と改称し、第八回は台北、昭和十一年第九回新京、昭和十二年日支事変勃発により、第十回会議は翌十三年に延期され、同年十一月九日から三日間東京農林大臣官邸で開催された。昭和十四年第十一回は京城に開かれ、日満支家畜防疫会議と称し、蒙古連合自治政府臨時政府、支那維新政府の代表者も参加して、東亜共栄への道は愈々強固となった。昭和十五年第十二回は新京に開催され、東亜家畜防疫会議と改称した。昭和十六年第十三回東亜家畜防疫会議を台北に招集、第十四回は東京赤坂三會堂に昭和十七年十一月十七日から三日間開催したるを最後として、昭和十八年以降、大東亜戦争愈々重大なる段階に至り、歴史ある本会議の幕は閉じられたのである]とのこと。

「第五回家畜防疫会議要録」によれば、小倉先生はもちろん、出席されていて、第三日、五、特殊研究事項報告、四、台湾総督府 19ページに中央研究所研究事項 小倉技師報告 四、鶏の住血原虫に依る疾患に関する研究としてあった。

佐藤氏が「恐らく小倉先生の発表では、発表資料が提出されていたものと思われるが、この議事録では27ページ以降に、会議の速記録が掲載されているので、会議資料の掲載は、省略されたとのことが残念。」と書いてきていた。

そして速記録の78~80ページに、小倉先生の報告内容が記録されているが、80ページに「夫カラ第四番目トシテ鶏ノ住血原虫ニ依ル疾患ニ関スル研究ヲ行ツテ居リマス。私ガ見マシタ原虫ハヘモスポリヂア三種トリパノゾーマ一種デアリマス。」という3行のみであった。

この「ヘモスポリヂア」というのは、住血胞子虫[目]に属するもの」という意味で、プラスモジウム科、プラスモジウム属、ヘモプロテウス科、ヘモプロテウス属とロイコチトゾーン属に属する原虫がある。

私、秋葉もロイコチトゾーン原虫を発見し、まだ種名が不明であった時期には住血原虫に起因する疾病とか、住血原虫病と呼んだりしていたので、この昭和7年当時は、まだロイコチトゾーン原虫と同定されていなかったのかもしれない。

それにしても昭和7年12月といえは、小倉先生が台北帝大に赴任されたのが、昭和6年8月の某(?)日なので、その翌年の12月の報告ということになる。たった1年しか経っていない。

北大で当時の最先端のドイツ医学の細菌学、血液学、原虫学、病理学を取り入れた教育、調査、研究指導をされていた先生には、この1年間に、台北帝大助教授としての教育、指導と共に、中央研究所技師を兼務されていたので、そこでの調査研究、指導などを通じて、知り得た台湾の家畜衛生の分野の状況から、立ち遅れを痛感され、一から五の問題を当面の課題として、研究項目として取り上げ、それぞれについての調査研究状況を報告されたのであろう。

小倉先生は特に血液学に対して造詣が深く、馬の伝染性貧血、牛のピロプラスマ、豚では豚コレラなどで血液検査を実施してこられたので、鶏の血液検査も実施してみたところ、面白い原虫が検出されたということで、興味も持たれて項目にも加えられたのでしょう。

そして、原虫名はフランス語も勉強されていたので、フランスの学術雑誌から、ロイコチトゾーン・カウレリー、ロイコチトゾーン・サブラゼシー、そして、少し違うものの3種類と同定されたことであろう。

しかし、台湾での家畜家禽の疾病の重要性、優先順位からいえば、鶏の住血原虫病は低い方に属するので、他の課題を研究されながら、病性鑑定に持ち込ま

れたり、調査を依頼された時々、それぞれの病性の観察や、治療試験も試みられていたものであろう。

しかし戦争が激化し、軍部から要望された軍馬、牛、豚の疾病などが、最重要な研究課題として、取り上げられ、鶏のロイコチトゾーン症についての研究などは、小倉先生ご自身が、興味を持たれていたとしても、なされる余裕など全くなかったものと推測される。

そんな昭和15年、森氏からの鑑定依頼があり、森大三の報告：所謂鶏マラリアに就いて。台湾畜産学会報、3(10)37-38(1940)の中で「ロイコチトゾーンが検出されたとし(台北帝大小倉博士に依れば、ロイコチトゾーンには病原性あるも、トリパノゾーマには病原性なし)と括弧内に、また「本症の病原体はABの二型ありて…」と二型のみ教えを受けたことを書いて報告されたということになる。

また「小倉は台湾の鶏に3種が見られると云って居る」と書かれた森下先生の次の著書の発行は昭和18年である。

森下薫：第3綱 胞子虫類, Leucocytozoon. 系統動物学。第一巻(大島広・岡田弥一郎監輯)238-239, 養賢堂, 東京(1943)昭和18年

論文の執筆時期はその1,2年前、昭和16年前後となるので、その時には、森氏の報告が見られるように、すでにロイコチトゾーンと同定されていた。これら森下薫先生と森氏の記述については畜産の研究、62(11)1234ページからなどで論じました。

結局、小倉先生自身は「ロイコチトゾーンに関係した報告を書くためには、発生状況について、といった程度の報告はできず、きちんとした調査研究を実施したものでなければ…」と思っておられたことであろう。

しかし、自分自身の血液学、原虫学の興味のみでは、鶏の原虫病についての研究継続は、時勢が許さなくなっていたということ。このことから、小倉先生自身がロイコチトゾーンという学名を用いての報告はないと結論付けて良いものと思われる(秋葉)。

これに関連した小倉先生の報告としては「第五回家畜防疫会議要録」の19ページにある小倉技師報告 四、鶏の住血原虫に依る疾患に関する研究と80ページにある「夫カラ第四番目トシテ鶏ノ住血原虫ニ依ル疾患ニ関スル研究ヲ行ツテ居リマス。私ガ見マシタ原虫ハヘモスポリヂア三種トリパノ

ゾーマー種デアリマス。」という3行のみということになる。

小倉先生は北海道帝国大学家畜微生物学教室の助手として、学究の道に入られて以来、ずっと家畜家禽の多方面の疾病について、それぞれの学問の進歩を取り入れながら、しかも時代の要請にも沿いながら、調査研究をされ、そして多くの学生や関係者を指導される立場におられたのである。自分の興味だけで研究をすることは許されなかった。

それに引き換え、私、秋葉の場合は、小倉先生とは違って、平和な時代となっており、しかも家畜衛生試験場の2番目の地位におられた石井進第2研究部長、研究面ではトップの地位におられた石井先生が、「君が見付けたのだから、本場に帰してやるから、継続して研究するように」との、有り難いお言葉を頂き、本場で、この病気だけについての研究継続を可能にして下さったのである。

しかし、この有り難いお言葉にもかかわらず、私の知識は限られていて、原虫にしても、コクシジウムについては少し知っているのみでしたし、媒介者の昆虫やダニについても、殺虫剤や薬剤についても、などなど、ほとんど知らないことだらけであった。

そこで、その時々、それぞれの専門家の教えを受けながら、一つずつ壁を乗り越え、1日も早く安心して夏が越せるようにしてあげたいとの一念で、夏休みも返上して頑張ってきたのである。

毎年、今年はここまで分かった。次は、この問題を、このようにして明らかにしたい。一人だけでは、なかなか進展しないので、興味のある方は、このようなことを試してみたいなどと、毎年、養鶏雑誌、講習会などで、協力を要請してきた。

思い上がりではないが、この病気については私に全責任があるとさえ思っていたのである。この病気

の研究に私は秘密など持っていなかった。常に、その時々私の考え方を皆さんに話して、何でも良い、一つでも、こんなことを聞いたら笑われるのでは…などという心配はいらない。知らないのが当たり前なので、何でも質問して下さいと常に話していた。そして多くの方々の協力を得て、1日も早く頑張ってきたのである。

しかも、多頭羽飼育時代に入り、夏期における重要疾病と位置付けられた。私の在職中に2度もロイコチトゾーブームが起きたのです。有り難いことであった。

昭和29年に、兵庫県和田山町にあった農林省家畜衛生試験場中国支場で、この原虫を発見して以来、媒介者を決定、生活環の輪郭を明らかとし、有効な薬剤も開発し、予防治療対策も樹立し、ワクチン開発への道順を公表し、農林水産省家畜衛生試験場九州支場長を最後に停年退職。その後、ワクチンが開発され実際に応用されるに至ったのである。

しかし、すべて平坦であったわけではない。それについては「あとがき」の中で触れることにした。

思えば、小倉先生が時代の要請で、この原虫について研究できなかったことを、孫弟子と言わせて貰うことを許して貰って、その孫弟子の秋葉が、平和な時代に引き継がせて貰ったともいえるのではなからうか。こんな巡り合わせであったのであろうか。

上述した方々は、皆さん、すでに他界されている。冥福をお祈りしながら、この論文の中でこれらのことを紹介しながら、書き残し、感謝の気持ちを表したいと思っているのである。

これで、小倉先生とロイコチトゾーンとの関係という点から、見ておかなければならないという文献はなくなった。